

石岡を掘る6

古代特集



令和2年

8月1日(土) ▶ 11月3日(火・祝)

常陸風土記の丘 展示室

月曜休館 (祝祭日のときはその翌日)

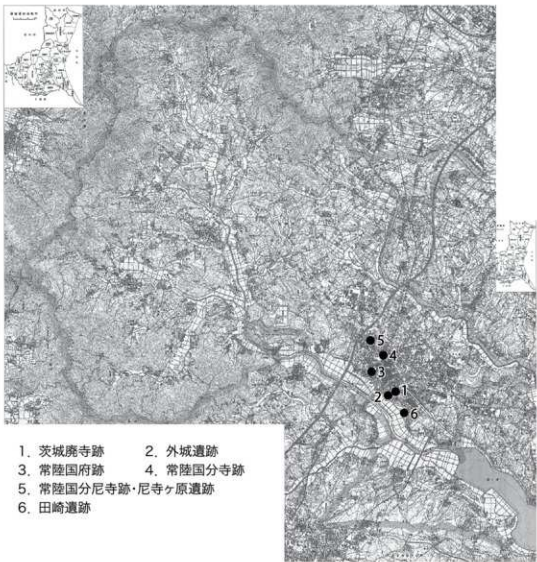
午前9時～午後5時 (11月は午後4時まで)

石岡市教育委員会 文化振興課

電話 0299-43-1111

常陸風土記の丘

石岡市染谷 1646 / 電話 0299-23-3888



1. 茨城廃寺跡
2. 外城遺跡
3. 常陸国府跡
4. 常陸国分寺跡
5. 常陸国分尼寺跡・尼寺ヶ原遺跡
6. 田崎遺跡

●例言●

本冊子は、2020(令和2)年8月1日～11月3日を会期として、常陸風土記の丘展示室において開催する「石岡を掘る6」に際して作成したものです。

展示および本冊子の執筆・編集は、石岡市教育委員会 文化振興課(谷仲俊雄)が行いました。

本冊子で使用した地図は、国土地理院数値地図25000から部分転載いたしました。

●ご協力・ご助言をいただいた方々●(敬称略)

梅田由子 黒澤彰哉 三井 猛 皆川貴之
有限会社三井考測

茨城廃寺跡

—明らかになった「茨木寺」—

石岡市貝地に位置する寺院跡で、平成28年度まで6次にわたる発掘調査が行われました。

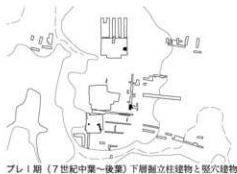
東に金堂、西に塔が並ぶ法隆寺式伽藍配置で、北方にはがらん 堅穴建物群、東方には掘立柱建物群と堅穴建物群からなる付属施設が存在しています。



7世紀中葉～後葉に小規模な仏堂が建立され、7世紀末に本格的な伽藍を伴う寺院として整備され、8世紀前葉に完成します。その後、寺域を区画する溝の掘削や伽藍の再編・改修が行われますが、10世紀前半に伽藍は廃絶。掘立柱建物により再建されますが、それも10世紀後半に廃絶してしまいます。



7世紀後半から10世紀前半にかけての創建から廃絶に至るまでの変遷が、その初期段階、再建段階までが明らかになった希少な事例です。



▲茨城廃寺跡の変遷

0 50m



塔と初期建物の柱穴



(左上) 再建仏堂 (手前)

(左下) 「東院」建物か

(下) 「南院」建物か



外城遺跡

—古代茨城郡役所の推定地—

茨城廃寺跡の南西約0.3kmに存在する鎌倉時代から戦国時代の城館で、現地には今でも堀や土塁が残っています。

奈良・平安時代の土器や瓦も散布しており、「フンダテ(古館)」「カ

ンドリ」という地名も残ることから、古代常陸国の茨城郡の役所(ぐらけ ぐんが)(郡家、郡衙)に推定されています。

なかでも昭和46年に出土した軒丸瓦は、常陸国府の国庁に葺かれるために導入されたものよりも一段階古く、8世紀中葉以前と考えられるものです。とすると、8世紀前半段階に瓦葺きの



建物の存在が予想できることになりました。その建物こそが古代茨城郡役所でしょう。

その建物跡を探して、発掘調査を進めています。

常陸国府跡

—国庁の全容が明らかに—

常陸国府跡は、平成10年度から18年度までの発掘調査により、石岡小学校の敷地内地下で発見されました。調査では、国府の中心であり、儀式や政務を行う国庁と、行政実務を行う曹司そうしの存在が明らかとなり、建物の配置や構造とともに、その遷り変わりも確認されました。



国庁のはじまりは、今から約1300年前の7世紀末頃。その後も同じ場所で11世紀頃まで、約300年間機能していたと考えられ、国庁の誕生から消滅までを通史的に見ることができます。

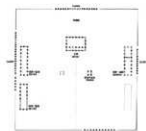
国庁は、四方を塀で囲まれた一辺約100mの区画をもっていました。その内部には、正殿せいでん・前殿ぜんでん・脇殿わきでん・楼閣ろうかくなどの建物跡が、左右対称に整然と配置されていたことが確認されました。また、ある時期、これらの西側には国庁正殿の規模を上回る曹司が建設されていたことも判明しました。

このように国庁のほぼ全容が確認された例は極めて少なく、全国的にも大変貴重な遺跡といえます。

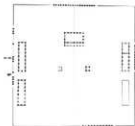
現在遺跡は、小学校の校庭の地下に保存されています。



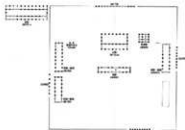
第0期(7世紀末～8世紀初頭)



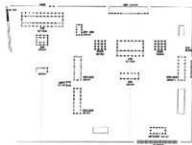
第1a期(8世紀前半) 定型化国庁の成立



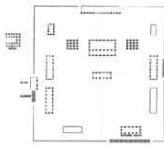
第1b期(8世紀中葉) 国庁西辺の改作



第2期(8世紀中葉) 国庁の瓦葺化と曹司正殿の出現



第3a期(9世紀前半) 国庁と曹司の一体化



第3b期(9世紀後半) 曹司正殿の消滅と西辺の道蔽



第4期(10世紀前半) 国庁院の消滅と終末期国庁の出現



第5期(～10世紀後半以降) 終末期国庁の消滅

▲常陸国府跡の変遷

0 50m



初期国庁の発見



国庁の東西に広がる遺跡



大型建物跡・曹司正殿



国庁の西脇殿・西樓閣



国庁正殿の発見



東西対称配置の東樓閣



国庁の西脇が判明



国庁の確定・再確認

常陸国分寺跡

—塔跡の発見—

常陸国分寺跡は、遺跡の国宝にあたる「特別史跡」に指定されており、ちゆうもん こんどう こうどう かいちゆう しょうろう中門・金堂・講堂・回廊・鐘楼といった主要伽藍がらんを構成する建物群が確認されています。しかし、塔については不明でした。

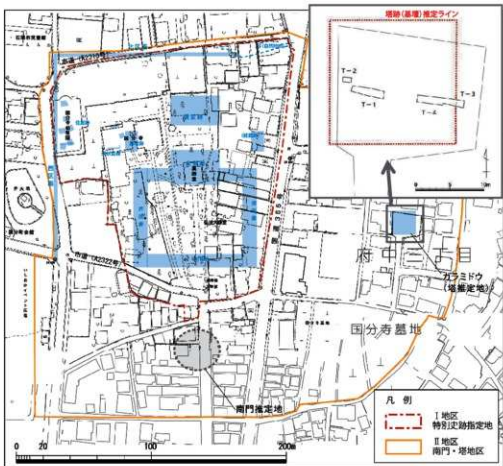


現在の国分寺の東側に「ガラミドウ」という地名があります。かつて3間×3間で中央に心礎と思われる石があったと記録されており、塔跡の存在が推定されてきました。しかし、その後建物が建設され、礎石も失われてしまいました。

令和元年、土地所有者の協力をいただいたことから、「ガラミドウ」の発掘調査を行いました。その結果、版築はんちく（地盤改良工事）を持つ建物跡を発見しました。その規模は1辺15m以上。堅固な版築の状況から、国分寺の塔跡と考えられる建物跡の発見です。



▲ガラミドウで発見した版築（地盤改良工事）の様子



▲常陸国分寺跡と「ガラミドウ」の調査成果



◀昭和初期の「ガラミドウ」
 (國學院大学デジタル・ミュージアム「柴田常恵写真資料」より)
 明治後半から昭和前期にかけて活躍した考古学者 柴田常恵氏が残した写真です。

「常陸石岡 ガラ御堂礎石 廣瀬栄一氏より 昭和六、一一」とメモされています。

尼寺ヶ原遺跡

—寺の東隣に存在した
小型な掘立柱建物の性格は？—

石岡市若松の常陸国分尼寺跡の周辺に存在する遺跡です。昭和62年の発掘調査では「尼寺」と墨書された土器が出土しており、国分尼寺との関係が推測されました。



平成25年12月、個人住宅建設に伴い発掘調査を行いました。調査地は史跡公園として保存している国分尼寺の中心地のすぐ東側であり、多くの発見が予想されました。

住宅の建設される70㎡あまりの表土を掘削したところ、発見できたのは径50cmから100cm程度の穴10個あまり。しかし、よく見るとうち8個は東西南北に整然と並んでいました。掘ってみると柱の腐った痕跡があることから、これらには柱が建っていた、つまり、掘立柱建物跡だと判断することができました。柱と柱の間の数は東西南北ともに2間で、面積は23㎡、7坪と小型なものでした。出土した土器から国分尼寺と同時期であり、関係する建物跡と考えられますが、残念ながら具体的な用途はまだわかっていません。寺のすぐ東側に存在した小型な建物、みなさんはどのように考えますか？



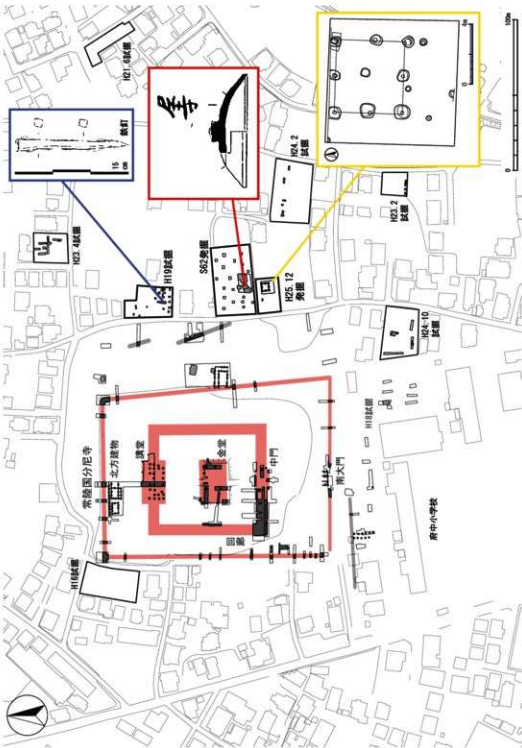
▲ 調査区の全景
(奥の芝生が常陸国分尼寺跡)



▲ 遺構の確認作業風景



掘立柱建物の柱跡 ▶
(黒い部分が柱の腐った痕跡)



▲常陸国分尼寺跡・尼寺ヶ原遺跡

田崎遺跡

—マツリで使われた土器—

平成20・21年度に国道6号線千代田石岡バイパス建設に伴い、茨城県教育財団が発掘調査を行いました。調査区中央部の斜面では、東海地方(静岡県湖西市)産の須恵器や土玉、土錘、炭化米などがまとまって出土しました(第1号遺物集中地点)。実用品ではない、ミニチュアの土器も多いことから、マツリ—祭祀で使われたものと考えられます。



時期は7世紀末頃から8世紀初め頃。古墳時代から奈良時代



への移り変わりの頃の祭祀の様子を物語っています。当時の人々はどんな祈りを捧げたのでしょうか。

▲田崎遺跡の全景(『田崎遺跡』2010年、茨城県教育財団より転載)

文化財調査報告会関連展示・発掘調査速報展

石岡を掘る6 古代特集

令和2年8月1日発行

編 集 石岡市教育委員会 文化振興課

発 行 石岡市教育委員会

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡 5680-1

常陸風土記の丘

〒315-0007 茨城県石岡市染谷 1646